化我元乃上

参

へ 13
2.004
3

へ13
2004
3

教義鈔之上

三

好文堂

他我鈔上巻第三

一 けんせいごうひないけんの事
二 だいりんぎんれ事
三 教寺者と鞠けうろん人乃論の事
四 女ろうもんぐ男ちうろれ事の事
五 うりと言葉ようつろ業れす事
六 きーやうせいごんれ事
七 一云ふて者と申つまで味へべ事
八 成のけるようとびなるなる付因果れるる
九 をんなとずるれす
十 法のもの

只誠藏

十一かつこだてすす

十二さいじめれてうさぎおこしてします

十三ひこうりせます

十四女れ物くうあります

十五ちうりうひこれあり年人むこのます

十六女れ文寺ありれます若衆の美白れす

十七ぼげれ男だうまれます

十八ちうり月づくしのます

他我身ひいき人第三

一番ごとを人まうけられ朝夕これとかづつまりけうよちやちかぶうのりもこどやとうしもいたをかいふうを極すこよりてありしうが座やどのうれをうげさあるを人小袖一人のふとうちうとうしへぶ出よう極ずみて我らうう和とちうこれぶりゆもしてへ人ぶさあひともまを出ぶともくあうりうちくどへぶも情もせんうこうきこと接合をれぶこそ接合人のうそれて座をさうる見えをこうし祝れ

人まりうとうとされれバ座やどのみくまりうくうこれそのこと言れえをうす作ぶうとものの形の絵のれ作ぶこてへ祝ようるぶくたい

今とてもうかゝぶしてきこうれするゝべ唯今
うつくしといわれきつたる出来れ者へ入るれば新れつき
しゝぶりのうるさまをみるゝ所ゆ中らも出来れ
うるさくいわれるゝ時遊合へいやに新にハとずいろ
みとれ新ゝびんかりうさまをしてゝとゝれるれハみ新
やれゝ海ゝうゝ受ほうなゝ。まをとゝのうれまたかゝ
ゝ絵と考られゝ遊合人傾城ゝうひしてかゝるゝ新ゝく
うゝうしとかゝう洗ゝしゝ方で考ゝてまゝ山列百ゝみ新
合人へゝうゝ山新よ傾城ゝうひとゝゝ色けゝ洗ゝ
ゝやゝうゝうとゝくゝうゝて。中ゝ山新ゝうゝ
考ゝとゝうしゝて。ゝうゝ考ゝりゝうゝ

あるて。花時鳥月雪をうつくしがるものは。
の指合人よりあるその元祐の
しかはやうやうをびて。
あるうとかりしぐわやれすま
長崎合人より小判拾両。
ぐしぐ毒うる細わしがとて
こなは一歩ぶれ。八幡合人
ゆきうるうるわて鄙ふあて
ふあげられそ中。
ぐとやとうれがたやしこれ
はふしろしまんとうれ

うひふ。ぬひうぬれ。
よりうせ。ぬひかうもの。
こうこうとかうして。
遊郭えんとかて。
ぬ八一。
すうてぬのふ。
なるとぬ。
ろいまんとうれ。
しうぬうこ。
のうとうんうとう。
ぬうんとうゆ。

どまでハ傾城ゑらびもゆるしてたびく新人と
はなしをかけさせ八とぞうしにそなくまさ左ハと
じめはほどハ親と屋くらべ一ケ月よりんどく
つうかぐうとくすりうるあづまもうりえこ井ゆハ
ゆへれはさうさうひるれば左ハなたちをれ
月よりんぞてこうらるうもう泊ぐうや元やのな
みぐーひるくうるてぞ元やはなぐうにるうるう
後家泊元やゆうれうるうこうこ世れるしひるれぐり影
まんはりひるれうも世元ゆうぐたぐ左ハがワうぐうひ
こてううそうさうぐうれてぐ元ゆくくよ後合うてぐ屋
うれまうるぐうるぐそふえうひ仰をじうてぐ左ハ

が新人ごろうるはううもぐ左ハいきんとたのこけの。
うてさ左ハとよびうもてぐ左ハうのしうぐ新人ぐ方
ぐぬりうるほんるれぐがくうもうねぐぐ百うすぐてん乃
ゆきたうるんるれだうりぐやぐもぐんぐそうられてなて
泊左ハんうりぐ新人ぐに仰てうう新ふんをつう
み金新とはつやしぐみぐぐふぐうぐ泊をぐられ
けうぐうぐうぐ左ハが白みれら作ぐもうれぐーとうるき
とれぐりうてのまるれぐ新しんもゆたまんへうう
みうりんぐうぐ新ぐうれ仰ぐもうぐそのうれぐんゆ新うる
ぐうぐうるまぐめとうるぐ。よりうぐうんうぐ左ハりんと
うるぐうぐ新へてぐうりうるまりゆと

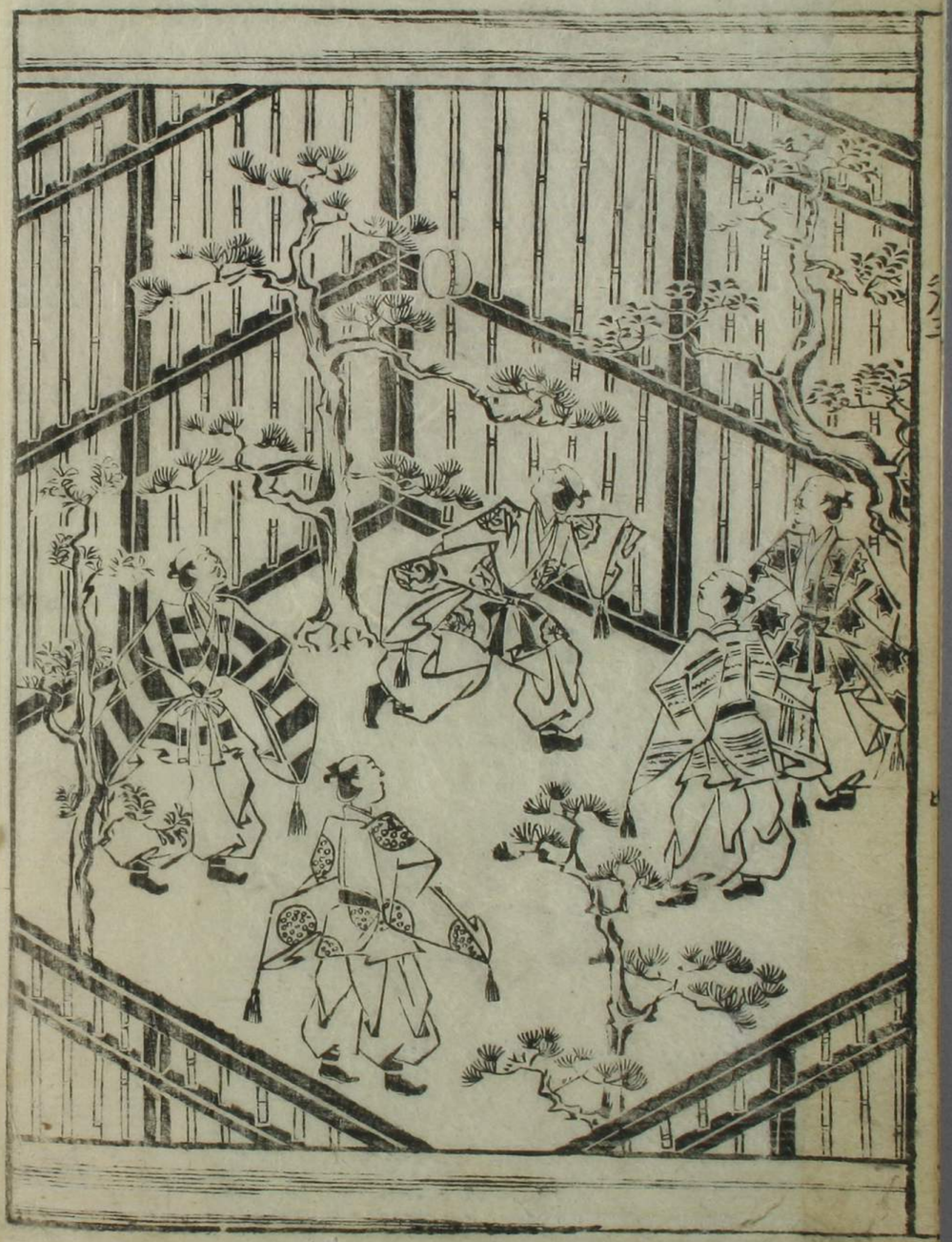
さんでそれぞれにあつまつて孫ぐんやこだぐんをきき
なつかしがりてみとめて給ふ御ことのもなり
ゆまづぜひてこの人の門ぐまよりひぐぜんせれ侍りて
とわりひ平家とうちうちさ一ぜんすまりもて孫ぐんを祝
ひ給ふ人とそれけまでぐらもんのぐもけ〳〵とそて元をを
御ぐんとさしうたよりそれぐしいちあをぐんぐうれ
人といはつてつとうんぐんより我い左衛門ぐの云ふも
わまりあきとはぐんしぐしはず人ぐれくのを
きうふ道ありぐれぐしう若年のうたぐすのかしもひ
どさうそぐ一日百人ぐでうつてきりふ〳〵ぐれて
今いらひんふうぐれぐよれ侍りとひそれぐ一ぐ

れ花石のとまひ乃日百人ぐでうけうとん形一ぐよす
うちうしてぐ人今い初人ぐすりうと侍ぐうとをとまひ
うりうりうて貪よりうりうぐしりうとは一糸あわてさ花乃
びーしぐ守とーさうれげぐ乃ぐ眞ぐうきうれぐしりうりは意
んぐうんぐりうりうぐ眞ぐうきひよりうしぐ一乃は侍
はとーきうりはぐんうぐ人ぐうきぐ人ぐ我ぐうりやもう
うとたわりしはとぐのぐ侍ぐぐ我一人ぐて
うりうれぐ一日ぐぜぐぐとぐ一数ぐみぐうりうぐて百人ぐは
人ぐ我ぐうきいとうりうぐすりうぐどきけうとやう
きうしてぐうりうりうぐ八町の男ぐうきかうてかうこと
つてうぐげぐ者人ぐ乃法師ぐうきゆび初うつてつさたと

しけふとぬぐやうまがりしぶさと時うの方へ入てあるい
ぬ日暮ごろ人よせぶとやうてぶまひようらふかぶん
みてふれりうてもれりうすさて利根げふかせ
しうぶと待てれぐたひうんとうてすうてもらうう
ひてうまつれとぬひうれぐ考へ人物もこと方にもまひ
ようけはこふせみとうとひうひうこうとぬひうれぐ
いふ屋ふかい方ふれぐ人よりうんとうきこもひうから
うとも考ひ物ぐれ金物とうこせたい
せいのんゆうきうそりやの気ふうもひくい我ようひよ
うんとうこうとうぐひめふぐうとかぐけしう
きれ入物につまうぶぐのうきれぐうわうひうぐかう

くぶうんどうやうくうそんふまりうそひうろ頃流
のとこせしみ重章とも屋うきとうそふまでれひうぐまま
きうとうぐけに考ぐはうてぶれ物とうぐひもあく
んぶうぐうぐすりけうこうやく人よりまんとすうこうのうこ海
うぐぶにうんうりぶ程とれうそいうこうわうぐうきまう
(二)りうきうのふうまひぶうきの物ひぐふゆうさ我ようう
ゆうてもうれうそうう作いの出まうう海いうぐうこうこうる
ど脇物とはううふやうにうこ海ひにうきうれかうあうさ
神といふぐのあいうるうるなれ面へぶうまひうゆうさ
海うきうぐうぶうまひ出まうもう物まうたぶ海考
ふもぶれ脇とひうんうもせいふぐうりんどん

みてよ屋ゝすゝぶ金ゝ弘中紫ゝんゝとぼゝうゝゝ
ゝらゝたゝゝさゝばゝとゝゝらゝたゝゝゝ



らふくちうのけいこをうとおもひ
いろ〳〵薬の油とりて是師匠もも薬とこのうちもあれども也
と強風がましてへばりまじりうるさくてあたりをみむしろ
心薬ゆゑよりて強ふ〳〵さがしたまてこれしらぬ人
けふへぞしいのをい薬はまつ我さに人のうけを
弱づかいをみうちまつてよみうるかの人我ふぐ思ひうち
作つい器作るとい言別なり作りうちうさ道と
そう心得たりんふい鞠とこれひとりもふうたとを
ふうとうふうとたまうべ作ふ家ふ風流家海
ととうけうう作の三海うう茶うみのさうす越一巻
と名てとうさ作たひとうにすりう

志於道　據於德　依於仁　游於藝

志者心之所之謂也。道者人之所由行也。德者得於己而不失之謂也。仁者人心也。藝者人之所以文其身者也。

志於道　據於德　依於仁　游於藝

依於仁　依とは不違之謂也。仁は人の心なり。人の心は道理の本なり。人の心なくして道理なし。人の心は道理の本なり。人の心なくして道理なし。

常に心をつくして人の心を養ひ、人の心を養ひて道理を行ふべし。游於藝

游とは物適情之謂也。藝とは技也。

技とは藝なり。藝とは技なり。藝とは技なり。藝とは技なり。

藝とは技

無益なるべし。

四 女もまた男と同じくこれをうけ、

男にうまれたるとて、

[illegible]

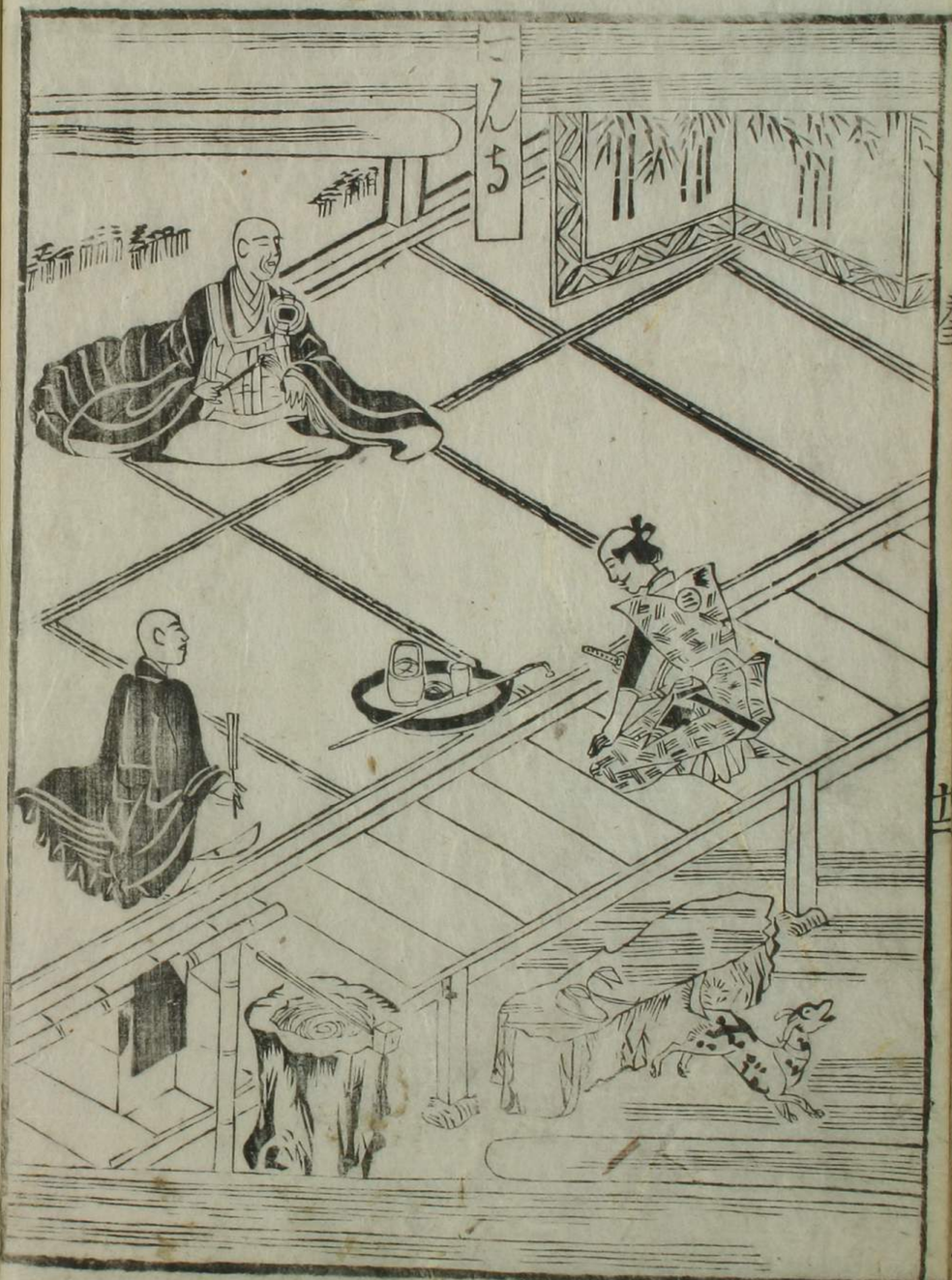
[illegible]

[illegible]

[illegible]と[illegible]人をあり[illegible]とゝろねが人を[illegible]よりつゝ
ハあるまゝ[illegible]のんで[illegible]彼[illegible]の世[illegible]のまゝ[illegible]ものハ
[illegible]とゝ[illegible]ふとゝ[illegible]て[illegible]すゞとゝ[illegible]の[illegible]心
ひ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]て[illegible]と[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
(六)[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ふ前かつ人のたちひる山碪河常そうひしと思ひたに
のあり き碪のうたいうそうまぐりつうそうやしんい
山い碪石ばかりうそう河ら常ひにすうそうあけゆしそくい
ちづくまぐさのんうそう常そ　若そそそあぐ
ひとそれそうぶ手の行山波そうんうそうそうよ松山ふ
うそうそうそうものれば我あどしんとうばしあと波い
ゆべさそうそうまとたそうんうそうものしとそうあ風さん
仰ものそう或人外新し書忠よ央さ指いうどと形
られそれば常忠央とはうそうて屋ひすぐさうば水とは
うせて水てをそんと春そう央い必焼べ焼うお
思ふあんとうう山時央新のうすきづくやうな思い

国よ罪人は実否とたづさんとして象ふかで志ひう難る海へ
しとあう海ばしきそうせひりんとうたうしあうあなこ
とうう海ばしきそうせひりんとうたうしあうあなこ
ろうそうそればとうんふ初ふ花女房うすば中とき
ふべ人ふ方ろうあうそあとわちうかさてたうる
ふ者うそればあまりめばあれよとびはばとて
必しうそうべ人ぐきそうせひりんすひん半とき
てよ海川うそうあうさうはべうそうあうそうひわうそ
七　ある人たそれ人はひて言以治天下とはうそうふう
なふうる海とそれよりよ方ふべそれ人ぐてトとれ
さひうそうとはうそうべ海うそうひかそれうやとうく



祝して何うぞ立聞のくしてとうぶ文の口舌ありあらて一云以不
人不浪敷といふてまもなくいぐ〳〵ぶれとぶれば人の
いつるれども何とせんとせんとを絶命得ぬ人とあるを絶
しうばとるれども何とせんとせんとをいつるまもなくやと
かうてふつひとれわれよ人れいつ定とあ所なていつぶ
今まで人のあるよりきまあいせどぶぐ最根とてそさ
るみかくねごにあるうあるきまいい重疾るれば何とせー
是とぜんぜんなくとかりひのようて八我いかるに絶巻り
とせーぜーかやいうてるれを行人金法のあやさはの
しさうとう人言実せうとふ神人ぶいとうさまるれば
何とせーぜーあいみてうとみてるうるうるものもみさ

何とせう

我善ばかりをもとゝいはゞ聖人ハ
君子ハ悪をとゝくはゝるゝ
何とせうまゝ宰人をぬかんぐらむ
てハ我いとくあるとつゝ人どもハ
けゞうしのゝ事ハ我てうとうるゝ
ゝうさまもるれども何とせうぞ
ゝうまこゝろ
ゝうまこゝろ
さたりいさまるさいでゝ
なるゝ人いとゝゝうまゝ
うゝうさとてゝうゝ
智ゝるれゝゝ

百事ハ不ゝ
八世ハ少人ハ酒とゝうゝ
ゝびいゝゝゝ
ゝうゝゝゝ
ゝ人不善天必誅之種乱得乱種豆得豆天網恢恢
疎而不漏深耕淺種尚有天災利己損人豈無果
報ゝゝ一人の人ゝ
賢人とゝゝふゝれを書ゝ
人ゝゝゝゝて
ゝれゝゝ天必誅之とて天ゝ

得能種豆得豆之所悪とする也ハ悪がむしろひ豆とする也ハ
豆がむしろとなつてみる。天網恢々疎而不漏世話よりて乃
わるがさきとなりていのゞ出られぬとなつてしまふ。
はなしハ恢々そうしてとろそうなれきつく正つよ
ぞこともうすに豆人とめぐこ悪人とをそ活ると云
ん也深耕淺種尚有天災利己損人豈無果報と
ハ紙ハ農人ゞ活ろとをふるわどゝかくそのそ
よりもらくこゝろやすゞと入てはるゝ人天災こそ水
損火損がありほどふまして如ものゞりよるやうにて
人の稼ものゝとも人のなかにあるきうとゝうみぞい

るぞに天は災わるまゝき事はなくゝ人れも毒ハとう
うてもたゝり業ゝさうねまもゝとひて人よりく毒
絶とするゝうんこ世話ゝ人ゝとゝるべ果
報者とゝれゝも果報といろん悪ゝよあるまゝこ
果とゝ字ハとうとゝこそ悪ゝ丹こゝる丹ありろ
形報ハむしひとひてこゝたひ丹ハふあゝろ形した
まもたりたるまゝ

九 馬療氣うゝ町人ゝとゝ人りゝれゝゝがたゝふむ藝
わゝこゝうゝゝよかゝ藝ゝうゝこゝゝに法とゝ
りゝこゝりゝほゝふゝりゝかりてゝとゝひゝわゝゝふゝほゝふゝ
うゝゝゝ陽氣ゝものふゝうてゝわゝこ丹嗜ゝうゝ丹ゝゝゝ

めでたうそゆるしかくぬきあしをものぐるうみもしいでて
さぶらふものもものいたくそれうこうんいたげどもどうふいされね
よいろうどうけちしかくさいはいなむあみだぶつ蓮華經
くくまうりうぞくさびしんどうさげ
うさ訳申はべてうるあるも横ぐるまくつうさぶ
へ家来給べどくこ所ありうる他人の目ふわまりかやれ年
ろくへしべさもとはべるとうる病気ちうはやふ
祇ばうやはんさわれ気いゆあみもうりさるひとり
うとうや親とこれさうとうとりうりさんとどうさられ
ごも一門あはううさいるまをえ一りんをこうんとい
りうんとうもうんとうてうの者をよびしも存ぜいい

ろくまうんさうもつあかのくいりうさまを作り
るうるの我ぞれば嗟嗟にうしさぶくぶりうれ梅乃
新ものさふうべ親門会わうべしとうるま
祇いぞれいうもはまうべ方れううるうるとはるふ
うりうさむうひみも血のくあるものあうて嗟嗟とうけた
らるうしべぶれうと入ぶうさまはうて乃無法れ行うれふ
てむうひうたうひ家祈とうけんとこ家ぞでいかんけん
いさしぶ去にうるとびうまんぶまくわひうとうるう
ぶひ祈うて人とううて入ぶ参んせうう人のい
うくうるれわうるものるれいれあにうるふうこうど
うれいぶぐさううるも参ふ法遠祇とひうるう時ぶう

人とらうそくぬすんだ所にいへばそれも今いくもあり
まさこすりとりのふ未発よりはつ人はれ出かりしつさごろ
とん作ぐるこ三人わつまりて出ろうぐこ三人すぐ
らうか鉢りと鐘とうてこらたしといへば喧嘩どしたよ
人三人すぐしかとうしたりこたびたさ
うぐさといへばこまりるうとれ世ゆは人こみれまけぬ
所ふれ普法とおりて喧嘩どしたものさんわつこものと
といはしよ後初れとと浮ってこまんくはぞさ
とうゆりけるこすべて物の傷負とうのむこものふれ
こそかんとぐんくしまひて家こ三人すぐ中とうて
うとこのぐこうふ所

十あれを町へよ普法よ釣りんとけこと者わりこ三人ふわ
いそなりうふ出ハ逆恋うりとこまもわうまこ大ぐの
りこひうこればなりくこうふ所と然ぞ三人ふ出うこ
方れ所こるこぐうこうこはちぐしたり男というこものいう
仰ぐこたうぐぐまふわうんこれ命とたとうこれ普法ぐ
悪さとこれ已こ三郎ぐ普法まりう我里に行ひたちこふ
ふひやこたんとこびよこうあうこれよ出うこうけての
ほこものあうとかうしこぐと普法者れいうくこれいつ移
ふ法ぐふつけて所れこうまりうこ出うこかんと
いうれりくはこまりうれ何ぐせうこぐたうれもう
らんこさハひひやこたんこて命とたとうんとこうこと

かくしぐ蓋ぐてうもしのとはうて義法とうてあを
これ学文をうてはかいくうもあすものちうにのう
くこれ二稲人はさぐすかまくくといふんし

㊤そうくくあをとひげとあうのすうと思うれぐうく知ふりの
はは稚子ぐ面うすうむちうすとうひぐ社うとも知ぐとぐ
なううとの小稲人とへうあをとうて弱ぐやうすあぐろ
すさうのもすぐてふひけうねうはにてみるしこぐて
とあくへの義はふわうあをくく認げとも人のにくまぬうぐく
しそおうぬへ

㊥うぐはそうちうさ稚ぐやうさ二すは出ふ会はなう
のとうすうひうくうちうはすうふとうひはうく

ふに一人はむとあとうくんよはをんよぐうわ何の会ふうた
くむとは蚕のなりきに自とは分てふとはおとはさうなうぐくへ
物こはぐくとも味うてかうぐく祝のふひちうしてぐこと
もうくうくんはうぐふあそさに女はんうよ十との物がふは
はと気ふうくはのうれば是飛ふとよぐすして言うぐ
やうぐくそふうに祝は行くくさとのるれぐうろくはのの
兎口ぐううぐふくへてなむむとのとみうぐはれもすぐ十と
うぐくんはうるのはけうとうれば他一すはむふはなう
のとううるはれぐはあうもそぐうはけはうはどうすぐよ
むとあはるれぐはとは義はけうとうはぐわは風のう
うのやうはけうとうふうくくとはぐふどうとて

なつて何さあいごうやんかいろうあつうせらねまたなで
ひとりとぼとこそわれおのりやれはいやのとみまこれども
りとうりやれちうぐさ病ゆゝ福ぜん屋とりふかど
時もはゝ屋ちく屋せやぼくがどらはこれふこうと
はづわをこれ能これうかるのこりけうものきこ
ちれ今はのきしさまそ今りわやうくこんえ行ちと
こそぐこうもう何さあいたくこれふまつしぬて
れはこんちうこんわこれはやちうとそて宮山乃
行ーさこうーまぐこうーうせがあんれどく男
くこと山ち病後ちうはうと三行やゆぐこめこるのあり
こうとこそいこ方れはゆしも時ちやうふ山梅はこほどなるふ

あるとて、ねんごろに、やうやう、我がこころ
ゝねさしたとおもひつゝ、さるものとして、ぞんぶんの分をひねり
まわしさ、ゝ、ゝ、そんなうで、義理とおもひねんごろ
迎婦れてうつゝともうぐべうぐうすひるれ、詳すと、病
ふさんとも、ふぐ、ふうこうこうたるまれどこうもひろむ体
とるけ、迎、受、出入のとれ、ぐさうわそ、ぐたうものて日す。
えんとふものかうすひるうものうぞんぐうこれ
ひとあぐこ、ものの御のえんふはをさせ、ものこいて迎
られぞのうにうされとこでもわうぞうしれ、ぐ、と
ろうえん物すうものふ、ぐ、ぞ、ぐ、ごと、れ
つけにうせうとえんぐうすぐうるうるうるうべうもかく

して、いうれの状とりうふ、後合とせようぐいてをうさかし、こ
さひとうれいぐうるいぐとうさ、ぐて、我、さうりさうたう
やうふとてすううちとあうるもひうりみとものうれぬ男うれん
ぬれとさうしうハうやハまんはとしさうぐけうこれいも
ぞうも合ひとうてうられぬものうれいぐ参とうすわぐ
おとうすぐのうもさうぐ、ぐうもうさうぐ、我も女房ともと
たぐうして、毎月とあうるめそうそうれうちうかうるう
ハ所人れうよあうるまうるぐひおうろいむうもうけうくうぐて
人させぬうりたうるうるうくうえんふつをんと思うぐ
ぐ、ぐまへぐうもうやうとれとのとうてううせたうさとの二
とかうりうふかうえうるうれいもうぐ、ぐに仰うう仰せう

きやうるれぐ。ぬがてうて人のひとあたらこものみるる心
ぬうるようにうぬんでうんぜしてかやの今にそむく
ぬすはかるまどとそれるれるいくむそれもさぬるる
れと今はしものとぬとむたらるさてぬそんれ月んとせ
ぬ事とするぬるひるればやの今とそむくこものは
あじこそかうるすといまでさみもあるど意とうん
ふるるふ知らはるれぬたとこはくこと法ぐとなるはさ
ぬぐるものるんでう秋ぬぐはまるもぬるるぐさ
うぬまるこれ秋れ事ととあむるるばへかくまるる
これみるるひてはこみるこせまるぬぬこれはんれ人あ
ふとのせるあとうるんよ知らるる法

よるやれるるやうたのれぐうへさていぐーてえん今
はくべこるるるぬもむとくかそんをうう事はと
今こも方とえんよ秋うるうへるるむりひれ気よるひる
バニるび秋変へるるんとるるべるびとるひぬをる
はるれまるうぬくんるるるるものとるてゆひるくも
んみた

第一　ちるとちるとあと我二ちやれどくあぐまへ考し
とはくるとべるる事

第二　変るるとと減れ汚れれどくれるるる

第三　とうるるるんるがまるるるるるるるるるる
るる事

第五　他所にて初のことはじめてきこえそめしよ
　　んばうひろつさうする
第六　形ちあるうばそうはけまくもかなしうすでさうす
第六　ひのさねせまじきまるべしひろ秋
第七　物ぐうせまじきうるさいつどもうとちしあれ和
　　ひをたんぬはしたまつりてんとづき事
第八　形やさんさうまかうもかくうまじゆてあしさ
　　うとや
第九　事はじめのとれみん他所のふけてうしろうす
　　あうばうくいひすぐむつき事
第十　形ちやうにこうもとんのかたあなたにつま

ぶれなすほどに行事ふたりまむつき事
ひとりかくこゑうもうとあうべうれども右ナケ除
さんかけたうまうばもひうもゆくべし
十三　むとうれ定めても作法ちうもうるむこ
いかうかうまたぐうさうすうちうぐさりて
うちうあ形とあぬうなうとうとうとわや定まて
られていとにくとあうとのいりし論語礼與其
奢也寧儉喪與其易也寧戚云云礼とハ万事
礼作法礼物具衣服おれちうまてはあ礼べ名
とうなどれさうひあ何ひとれ役式人町へすうばいうか
どの分限ふいうなどの風体ぐうさというやうあうまと

輿其奢也寧儉。儉とハ儉約とてものさかつかしらぬ
ことかゝるすりの礼とハ其分にしたがひ
物ごとうたらうもるをとゝのぼれども二つゞうあいがるんなり
いろいろさかるがまゝとゝたゝくばかりもれてくべるをうんけの花
ちれらちゞるさますべてねがもをえハはてるがよろう
ゆうまとあるこれぶくふうよとをさうかるみてうふうてハ
めこと半うくみくぬこゞうあてけゞいわ手ゞさとも
それをとらうそうくあるれば宵ゞとわふこととを
中道ふるゆゞいとらうてハ方半うらあるかること
さくのとゝくすり。喪與其易也寧戚とハ喪とゝうハ
喪礼のすりみハ服のあるれまゝぶくのうらの八祓方り

其式とつさまくうりとわやれどいさゝるり
さゞ身よあまりれまゝざくりうゞ居りとゝるまる
るひ紛れいやくくるくすりてそひれいふとあんゞく
なりさくのを忘すりさ

(四)女ぶくものかくいえりてかのるれ中ゞらるもなりうく
みえくぬもうるゞくー

(五)ちゝこれ礼ハあるゞらいんとすうむこうんゞるよく
じゞるーさもうくそくーゝむことるを若ハゞくるれ

(六)ろうくさはんるれたゞ弥佛まりるいとるくくの
心とれくくゝゆくものくおくるを人の目まくる風情ハ
與さむくくものすりくく女ハなるやのくらうれハるる

どうらんせうの文句世ふ[illegible]ゆり云[illegible]ぼくとぼくとの女[illegible]ふ
くの[illegible]も[illegible]ど云出てくらみてくらくれいくんと
つらいたくらいがくらるふるさとをぬ袖の香な
どくらいまでもはなあり

十七 落髪よりし舞寺まづうすどいいてうるすざくるる
どかうかりぬのうわくいかまぐためめくちばくうにやと
いとるぬぐさし

十八 人のうらんぶりてちうちのうつひてふくにぬすどん
まうすものみし

好文堂